

隆泉苑

さ の りゅう いち
—佐野隆一を知る—



三島市内には、「佐野」と名前がついた建物がいくつもあります。



これらは、三島市の誇る偉大な先輩、佐野隆一さんが市民のためにプレゼントしてくれた建物です。

佐野の名前はついていませんが、東西南北の小学校のプールもそうです。

佐野さんが小さいころ、三島の清流で遊んだことを思い出し、子どもたちのためにつくったのです。

佐野隆一の生涯①

佐野隆一の生涯

好奇心おうせいな少年時代

佐野さんは、明治二十二年（一八八九）三島市の久保町、今の中央町に生まれました。お父さんの米吉さんは「秋月」という和菓子屋を営み、その独創的な菓子は評判だったそうです。小さなころから利発で努力家、好奇心にみちた少年でした。南小学校から^{にらやま}韮山中（今の韮山高校）へ進み、化学の勉強を志して東京高等工業学校（今の東京工業大学）へ進学しました。



勉強にはげむ隆一少年

創造力で新製品を開発



加藤與五郎先生の言葉を思い出して…

社会人になると、学校で研究した応用化学を生かして、さまざまな発明をしました。

佐野さんの研究・開発のモットーは、工業学校の恩師、加藤與五郎先生からさずけられた、「決して人まね、物まねしない」でした。その当時無理だといわれ、使い道がないと思われる原料を使って、「だれも本格的に取り組まないからこそ、ねらいめなんだ」と、実際に使える製品をつくりました。

フェロアロイといわれる合金鉄じゅうきんてつがその一つです。鉄に他の金属を混ぜるときに入れる、添加剤てんかざいとして使われています。

化学工業界のリーダーへ

大正十四年（一九二五）に鉄興社てつこうしゃを設立、その後、日本石英硝子社せきえい硝子社、プラス・テク社、日本カーボン社、東邦アセチレン社など十社近くの会社をつくり、ガラス管、プラスチック、ハロンガスなどを製造しました。佐野さんは、こうして日本の工業の発展に貢献し、化学製品開発のリーダーとして活躍しました。



会社での記念講演で後輩に語りかける

美術品に先人の知恵をみる

佐野さんは一日の忙しい仕事が終わわり、家でくつろぐとき、自分で集めた古い美術品をながめるのを楽しみにしていました。お父さんの米吉さんも骨董品（ことうひん）を集める趣味人でしたが、佐野さんにとって美術品収集は「昔の人々の知恵や工夫を学び、仕事に生かすため」でした。

資源の少ない日本ですが、日本人は少ない資源を工夫して役立つものをつくりだす力にすぐれていたからこそ、世界でも有数の工業立国になったのです。

佐野さんの集めたコレクションは、日本画や中国の陶磁器、朝鮮の仏像など、様々な種類がありますが、佐野さんは、とくに日本の名刀を鑑賞するのが好きでした。鉄のかたま



眼光鋭く刀を鑑賞

りを、人間の手によって鍛え上げ、究極の曲線美に仕上げた刀。佐野さんが刀をみると、そこには技術者としての厳しい目もあつたに違いありません。

佐野美術館を設立



佐野美術館開館の日、来館者に作品解説

ありません。市民がいつでもよいものを見られるように、また、これから社会にでて活躍する子どもたちのために。よいことと思うとすぐに動く、佐野さんは不言実行（ふげんじつこう）の人でした。

こうして佐野さんは、両親のためにつくった三島市中田町の広大な日本庭園の一角に美術館を建てました。昭和四十一年（一九六六）のことでした。三島市はこの前年、多くの業績や貢献をたたえて、佐野さんに名誉市民の称号を贈りました。日本の社会の発展を常に考え、郷土への愛につくし「三島のお父さん」と呼ばれた佐野さんは、昭和五十二年（一九七七）、八十七才の生涯を閉じました。

佐野さんは喜寿（きじゅ）（七十七歳）になったとき、集めた美術品を寄付することにしました。場所はどこにしようか考えましたが、自分を育ててくれたふるさと三島以外には

佐野さんのことば

美術品は一つ一つ箱に入っています。箱には前と後ろがあります。箱の前をそろえてきちんと整理する。一つでも曲がって置けば、すべてが曲がってしまいます。一つをきちんとまっすぐに置けなければ、仕事もきちんとできません。

佐野美術館の渡邊妙子館長は、佐野さんが美術品のコレクションを整理していたときに話してくれた、忘れられないことばがあります。



自分の集めた美術品に囲まれてくつろぎのひとつ

佐野さんのことば②

また、会社の後輩や友人に、よく話していたことばがあります。

種をまかないでは何ものも生えない。種をまくということは、行動を起こすことである。

そこから失敗の芽が生えたら、かりとればよいし、成功の芽が生えたら、肥料をやればよいのである。

私は、自分の過去において、実際に何回かの失敗を、若い時代にくりかえしている。だから私は、成功は、失敗からしか生まれないと考えている。

先見の明（せんけん先を見通すこと）も、ここから生まれると思うって、まちがいないのだ。

佐野さんは、集めた美術品から昔の人の知恵をたくさん学びました。佐野さんは、ふるさと三島の子どもたちが、佐野美術館にある美術品から新しい発見をして、立派な人材が育ってくれることを願っていました。

そんな佐野さんの願いを今に伝えるため、佐野美術館では毎年、コレクションを公開し、さまざまな展覧会を開いています。



国宝 薙刀

びげんのくにのおさふねじゅうにんながみつ
銘 備前国長船住人長光造
鎌倉時代

この薙刀は、美作国(今の岡山県の東北部)の大名、津山家の家宝でした。
700年位前に長光という刀鍛冶がつくりました。長光が作った刀の中でも特に姿の美しい名品として知られています。長光は備前国(今の岡山県)の人で、長船派という刀鍛冶の集団をつくり、多くのすぐれた刀を生み出しました。



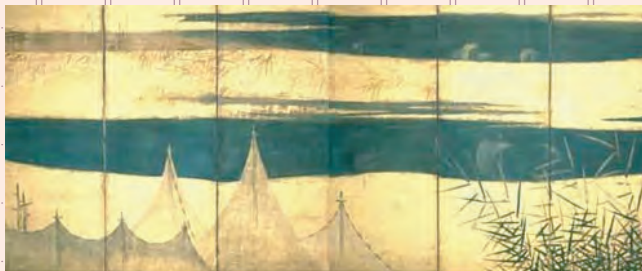
重要文化財 平安時代

だいにちによらいざぞう
大日如来坐像

大日如来は、仏教の一つである密教の世界の仏様です。この仏像は800年位前に作られました。シルクロードを経て中国から伝わった仏像は、平安時代、日本人の好みにあった姿形になりました。そのころ作られたこの仏様も、おだやかでやさしい姿をしています。金箔が全体に貼ってあります。

佐野美術館のコレクションは、日本や中国、朝鮮の美術品を中心に、陶磁器や日本画、能面、装身具など約三千点です。特に日本刀は名品が多くあります。

佐野美術館のおもなコレクション



左隻



右隻

重要美術品 網干図 桃山時代

あぼしず
網干図

かいほうゆうしやう
伝海北友松作

桃山時代

海北友松は、500年位前の桃山時代の画家です。友松は武士でしたが、独学で絵を勉強し、屏風や襖など大きな画面に風景を描きました。これは、魚をとる網が砂浜に干してある、海辺の風景です。近江(今の滋賀県)琵琶湖の風景とも言われています。絵の右から左に目線移すと、芦の葉に穂がつき、枯れていく四季の変化を見ることができます。

佐野さんの
やったことは
もっとすごいんだよ

大ちゃんも
佐野さんも
尊敬しちゃうわ

大ちゃんて
えらいんだ
すごいね



佐野隆一 略歴

明治22年（一八八九）8月1日 静岡県三島町に生まれる

明治43年（一九一〇）7月（21歳） 東京高等工業学校応用化学科卒業

明治43年（一九一〇）8月 横浜製糖株式会社技師

大正5年（一九一六）9月（27歳） 中村化学研究所技師

大正14年（一九二五）3月（36歳） 合資会社鐵興社を創立し代表社員となる

昭和12年（一九三七）12月（48歳） 日本石英硝子株式会社取締役社長

昭和14年（一九三九）12月（50歳） 株式会社鐵興社取締役社長

昭和26年（一九五二）12月（62歳） プラス・テック株式会社取締役社長

昭和28年（一九五三）5月（64歳） 日本カーボン株式会社取締役社長

昭和30年（一九五五）2月（66歳） 東邦アセチレン株式会社 取締役社長

昭和40年（一九六五）4月29日（76歳） 勲二等瑞宝章を受ける

11月8日 三島市より名誉市民の称号を受ける

昭和41年（一九六六）2月11日（77歳） 財団法人佐野美術館を設立

昭和47年（一九七二）11月（83歳） 財団法人佐野美術館理事長

昭和52年（一九七七）5月29日 東京都世田谷区弦巻の自宅にて逝去

享年87歳

正四位に叙せられ、

勲二等旭日重光章を受ける

趣味：美術品の収集、庭づくり、囲碁（日本棋院六段）、将棋



MEMO

学校名： ()年()組 名前：

〔主要参考文献〕「生誕100年記念 名誉市民 佐野隆一翁」記念誌編集委員会／編 静岡県三島市／発行

「佐野隆一さんの思い出」佐野亀路

平成16年度 文化庁芸術拠点形成事業『隆泉苑ガイド・3 佐野隆一を知る』web掲載版

著作：小澤高好(三島市立中郷中学校校長) イラスト：奥美奈子

編集：佐野美術館 〒411-0838 静岡県三島市中田町1-43 TEL055-975-7278

平成17年3月発行 平成24年4月改訂